

子宮頸がんから身を守るために



女性特有の病気・子宮がんは、

国内では乳がんに次ぐ発症数です。年間約7千人が診断され、約2千500人も死亡している重大な病気です。20〜30代女性では、全がんの中で子宮頸(けい)がんの発生率が最も高く、り患率も増え続けています。

とはいうものの、このがんは検診によって発見できる病気です。特に今月のテーマ、子宮頸がんは、検診によって前がん病変の段階で発見できる唯一のがんなのです。欧米ではがん予防意識が進んでおり、検診受診率は約80%に高まっています。

一方、国内では全国レベルの検診受診率が20%を下回り、本町でも25%しか検診していません(18年度)。進行がんを防ぐことができる最適な方法は、早期発見、早期治療。子宮頸がんは、それによってほぼ100%完治できるとい

われているのです。

どつやつつて調べる？ 子宮頸がん検査

「子宮頸部細胞診」でがん細胞をみつけます。

「細胞診」は、子宮頸部の表面から綿棒などでこすりとった細胞を顕微鏡で調べるものです。痛みはほとんどないのですが、時に少量の出血がみられることがあります。子宮や卵巣の臓器の横断像を画面に映し出す「経膈(ちつ)超音波(エコー)検査」も同時に行うことをお勧めしています。

子宮筋腫(きんしゆ)の有無や大きさ、卵巣の病気もある程度分かります(かなり小さな変化は確認できません)。

子宮頸がんは前がん病変の状態が長く、原因も分かっています。早い段階で見つければ、上皮内が

ん(大半は異型細胞が粘膜内にとどまる段階)で治療でき、子宮を残すことができます。

妊娠、出産を控えている年代の女性にとって大変重要な問題です。死亡リスクを下げるだけではなく、お産できる可能性を残し、OOL(クオリティー・オブ・ライフ)を高めることが重要です。

検診をなぜ受けないの？

検診受診者が増えない理由は何でしょうか？ 最も多かったのは「症状がないから」です(17年度乳幼児健診の時のお母さんアンケート)。

また「子宮頸がん検診に関する調査報告書」では「時間がない」「面倒」に次いで「費用がかかる」「手続きがわからない」「方法がわからず不安」「症状がないから」

が主な理由です。

検診対象年齢は20歳代からなっていますが、20代の受診者はごく少数です(16年から)。検診自体に恥ずかしさを伴う、あるいは若いから身近に感じづらいことなども検診しない理由として考えられます。しかし自覚症状があつてからでは遅いのです。

平成20年度から健診制度が変わり、特定健診・特定保健指導が始まります。それに伴って、町の健診(検診)内容も大幅に変わります。特定健診・特定保健指導は、今後医療保険者こととの検診となります。

しかし、がん検診はこれまで通り町の検診として継続します。3月いっぱいには19年度の個別健診として「旭川がん検診センター」でがん検診を受診できます。お気軽に保健福祉課保健指導係に申し込み、お問い合わせください。

新年度からのがん検診の方法は、内容が決まり次第お知らせします。検診時期、検診の申し込み方法、受け方、対象年齢、検診料金等が変わる予定です。